

◎国際学部

概要

国際学部の専門教育への導入として、「国際英語コミュニケーション」(2単位)、「初習外国語基礎Ⅲ・Ⅳ」(各1単位)、「初習外国語応用Ⅰ・Ⅱ」(各1単位)を必修科目とし、外国語によるコミュニケーションの基礎を修得させるとともに、世界の多様な国や地域の社会・文化への関心を喚起し、学部専門教育科目の履修に向けた動機付けを図る。

なお、初習外国語としては、ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・朝鮮語・タイ語の6言語を設定し、そのいずれかを選択させる。

達成目標

「国際英語コミュニケーション」は、国際語としての英語のあり方を多様な角度から見直し、理解を深めることを目標とする。

「初習外国語基礎Ⅲ・Ⅳ」では、各言語の「読む」・「書く」・「話す」・「聴く」の基礎的能力を養うとともに、当該国・地域の社会・文化に対する関心を喚起し、その基礎的理解を涵養することを目標とする。

「初習外国語応用Ⅰ・Ⅱ」は各言語の基礎をふまえ、専門外国語科目の効果的な履修につながる理解と運用能力を身につけさせることを目標とする。

カリキュラムの方針

「国際英語コミュニケーション」は、基盤教育のIntegrated English Iをふまえ、その理解の深化と拡大を通じて、さらに上級の英語および関連諸科目へと進めるよう、1年次後期に履修する。

専門導入科目の初習外国語は、1年次に「基礎Ⅲ」(前期)と「基礎Ⅳ」(後期)、2年次に「応用Ⅰ」(前期)と「応用Ⅱ」(後期)を履修する。これらのうち、1年次の「基礎Ⅲ」・「基礎Ⅳ」は、それぞれ基盤教育の初習外国語系教養科目「初習外国語基礎Ⅰ」(前期)および「同・基礎Ⅱ」(後期)と並行して履修することにより、1年次で集中的に基礎を強化し、2年次の「応用Ⅰ」・「応用Ⅱ」、さらに専門外国語科目への移行を効果的に進めることができる。

◎教育学部

概要

教育に関わる原理および現代的な諸課題に関する基礎的な知見を獲得し、専門教育科目へと橋渡しをする。

達成目標

教育に関わる原理を学ぶと同時に、教育に関わる現代的な諸課題に関する基礎的な知識を修得することを通して、教育を原理的かつ多角的に探求していくための知的基盤を獲得することを目標とする。

カリキュラムの方針

学校教育教員養成課程では、学生が教育を原理的に探求していくための知的基盤を確実に固められるように、「教育原論」、「教育心理学」の2科目を必修科目とし、さらに、現在の教育における重要な諸課題に対応した教育のあり方を探求するための基礎となる、発達障害、生涯学習、福祉、環境問題、健康問題、情報化、小学校での外国語活動、グローバル化に関わる8科目(選択科目)を用意している。

総合人間形成課程では、人間形成の視点から、現代の教育における諸課題に対応するための教育のあり方について知的基盤を形成し、やがて学生自からが選択することになる専門領域(人間発達、言語文化、地域

公共、環境創造、芸術文化、スポーツ健康)で自律的な学びが展開できるように、上記 10 科目の中から自由に 4 科目を選択できるよう配慮している。

◎工学部

概要

専門導入科目とは、専門教育へとつながる知識を身につけるための科目である。理工系の専門分野はほぼ例外なく数学的な手法に基礎を置いている。特に微積分学(解析学)は、その発見以来、変化する事象を記述する手法としてきわめて重要なものであり、大学のカリキュラムにおいても微分方程式や複素関数などのより進んだ科目の履修に欠かすことができない。ここでは、自然科学を記述する言語として微積分の基本的な知識と技能を修得することを目指す。

「応用化学基礎」(応用化学科のみ)は、応用化学科の専門教育につながる基礎科目である。

達成目標

「微積分学及演習 I, II」においては、1 変数関数の微積分、多変数関数の微積分、数列と級数に関する基本的な事項を深く理解すること、さらにそれらの応用に必要な計算技能を身につけることを目標とする。前者については、数列や級数の収束性についての定義や基本的事項の理解、1 変数と多変数関数の微分係数・偏微分係数や積分の定義とその意味の理解が挙げられる。後者については、初等関数と呼ばれる一群の関数の微積分法の修得、テイラー展開や極値問題など、基本的事項の応用力の養成を目指している。

「応用化学基礎」(応用化学科のみ)においては、以下の 3 点としている。

- (1) 高校の化学を理解し、応用できる。
- (2) 原子や分子の成り立ちを理解し、説明できる。
- (3) 数値・単位の扱い方や化合物名など、化学で用いられる「言葉」を理解し、応用できる。

カリキュラムの方針

専門導入科目のうち、「微積分学及演習 I, II」は工学部全学生の必修科目で、3 単位である。この科目は内容が広範にわたっているため、週に 2 コマ行い、それぞれ主として微分範囲の内容と積分範囲の内容をカバーしているが、完全には独立しているわけではなく、ある程度の関連はある。必要に応じて応用範囲の内容を身につけるために演習を行う。なお、学科指定のクラス分けを行っており、特に応用化学科と情報工学科のクラスについては、入学試験での出題科目や専門教育科目の特性を考慮して独自の内容となっているため、他の学科の学生はこれらのクラスを履修しても単位を修得することができない。

「応用化学基礎」(応用化学科のみ)は応用化学科の基盤的必修科目である。高校で学ぶ化学と大学で学ぶ化学との間には、本質的なギャップがある。そこで、専門教育科目を本格的に学び始める前にこのギャップについて学び、大学の化学をよりスムーズに理解できるように自主的に対策することがこの講義の目的である。この講義は、化学結合論、有機反応機構、無機・有機化合物の命名法、単位換算、有効数字、濃度計算の講義および演習から構成されている。大学で学ぶ自主性と基礎力を有するかどうかを評価する。

◎農学部

概要

専門教育へとつながる基礎となる科目である。

達成目標

農業および森林・林業の概要を把握し、また生命科学、そして農業と森林の科学に関する一般的な知識を修得することにより、環境保全や持続的生物生産に対する理解を深めることを目標とする。

カリキュラムの方針

農学部全学生に共通の基盤必修科目である。「生物資源の科学」、「農業と環境の科学」、および「農学部コア実習」からなる。「農業と環境の科学」では、地球環境問題から循環型社会に至るまで、農業をめぐる様々な環境問題の一般知識や考え方を学んだ上で、持続型社会を支える農業および農学の全体像の理解を深める。生物資源の科学では、農業・生物生産・生命科学に関する内容と森林・林業に関する基礎的な内容を学ぶ。農学部コア実習では、農林業に関連した幅広い体験学習(フィールドワーク)を通して現場から発想し、現場に貢献するという視点を育む。

